

中世日記文学『とはずがたり』引歌考

——『新日本古典文学大系』への批判を中心として——

西 沢 正 史

A Medieval Diary, *Towazugatari*
— A Study from the Hikiuta —

Masashi NISHIZAWA

1

物語文学や日記文学における引歌は、作中和歌や文章表現の修辭的な方法の一つとして広く用いられていて、さまざまな重層的・立体的効果をもたらし、作品世界に言い知れぬ深味をかもしているものである。

いうまでもないことだが、文学作品における引歌は、物語や日記の作者が、作中人物および読者の、引用された和歌を熟知しているという共通的认识・共感的感動を前提としてなしている修辭法である。言い換えれば、作者・作中人物・読者の共通の・共感的な磁場が設定され

ることによって、引歌は、作品世界に微妙な余情的広がりを与え、重層的・立体的な陰影をもたしているものと考えられる。

しかしながら、従来の引歌研究は、そうした「共通の・共感的な磁場」という基本が閑却され、往々にして技術的・遊戯的な言葉のあそびに終始してしまっていることも少なくないようである。なかには、研究の点数かせぎとなっている場合もないわけではない。

そうした引歌研究の現状は、引歌というものの認定が必ずしも容易ではないという困難な問題と深く関わっている。たとえば、『とはずがたり』の各注釈書における引歌をみても、何の基準も示されないまま

で注釈者の恣意的な方法によっているためか、かなりの差異が見られる。

なかには、右に述べたような引歌に関する基本的な論理などをほとんど無視した結果からか、遊戯的・技術的に引歌あるいは引歌まがいのものを羅列し、いたずらなる研究的自己満足に陥っている著名な注釈書もあって、何とも驚くばかりである。そうした注釈書の代表として、岩波書店・新日本古典文学大系『とはすがたり・たまきはる』（三角洋一氏校注、以下「三角新大系」と略称）があげられる。

三角新大系は、『とはすがたり』の注釈書として、最新のもので、最も権威あるものとされているらしいが、新機軸を出そうとしたあせり（？）のためか、他の注釈書に比べると、かなり多数の引歌・引歌まがいの歌を羅列しているばかりか、「引歌」「参考歌」「無表記歌」を巧妙に使いわけている。とりわけ、脚注という限定された狭いスペースに、むやみに参考歌を羅列したり、読者を惑わすような無表記歌を並べ立てたりして、愛読者の一人として至極残念である。

三角洋一氏だけの問題ではなく、自戒をこめて言うならば、引歌認定作業というような文学の基礎的研究は、学問的功名心の満足、学界における知名度のための点数かせぎばかりではなく、作品研究全体の方向性を見据えながら、研究者としての厳格で真摯な姿勢によってなされなければならないはずである。

ところで、私自身は、和歌の専門家でもないし、引歌に関してはあまり自信がないのであるが、引歌認定の基準についての一案として、現在のところ次のように考えている。

〔1〕 和歌や文章において、語句が共通的・類似的であること。

ただし、その語句は、一般的・類型的な歌語ではなくて、なるべく個性的・特異的なものであること。

〔2〕 和歌においては、語句の共通性・類似性のほか、詠者の意図・発想・主題・シチュエーションなどが類似的であること。

〔3〕 文章においては、語句の共通性・類似性のほか、場面状況・人間関係の対応性、典故の著名度などの条件を考慮する必要があること。

右のように考えてくると、引歌研究は、外形的・皮相的な言葉を問題にするだけではなく、引歌をめぐるさまざまな条件を考慮しなければならぬであろう。単なる遊戯的・好事家的な探索作業ではなく、広範な文学世界と緊密に関わらせながら、厳密かつ慎重になされなければならないように思われる。

2

『とはすがたり』の注釈書の主なるものは、およそ次のとおりである。

〔1〕 新潮日本古典集成『とはすがたり』（福田秀一氏校注・昭53・新潮社）

〔2〕 完訳日本の古典『とはすがたり』（久保田淳氏校注・昭60・小学館）

〔3〕 講談社学術文庫『とはすがたり』（次田香澄校注・昭62・講談社）

〔4〕 新日本古典文学大系『とはすがたり・たまきはる』（三角洋一氏校注・平6・岩波書店）

〔5〕 新編日本古典文学全集『とはすがたり』（久保田淳氏校注・平11・小学館）

右五書のうち、〔1〕の新潮日本古典集成は、刊行からすでに二十余年の歳月が経過して、内容的にも修正を要する点も少なくないの
で、参考程度にとどめておく。次の〔2〕の完訳日本の古典は最近〔5〕
として修正再刊されたので除外する。次の〔3〕の講談社学術文庫は、

文庫本という制約上、引歌数も少ないので参考程度にとどめておく。
本稿では、〔4〕の新日本古典文学大系を中心とし、〔5〕の新編日
本古典文学全集を参照しながら、『とはすがたり』巻一の引歌（和歌Ⅱ
短歌に限定）について、主として数量的・形式的な観点から、いささ
か吟味検討してみたいと思う。
さて、三角新大系の巻一において、引歌類として挙げられているの
は、七十六首（短歌に限定）で、脚注に記されたコメントによって、
私意に分類してみると、およそ次のようである。

『とはすがたり』巻1 引歌一覧表

○引歌 □参考歌 △引歌存疑 ×掲載なし

	引歌	出典	頁	本文	三角新大系	久保田新全集
1	三芳野のたのむの雁もひたぶるに君が方に ぞ寄ると鳴くなる	伊勢物語	3／10	「この春よりは、たのむの雁もわが方によ」 とて賜ふ。	○ よる	○
2	わが方に寄ると鳴くなる三芳野のたのむの 雁をいつか忘れむ	伊勢物語	3／10	右同	○ よる	○
3	白妙の鶴の毛衣年ふとも思ひそめてし人は 忘れじ	和歌題林 抄	4／5	翼こそ重ぬることのかなはずと着てだに馴 れよ鶴の毛衣	△ ふまえるか	×
4	手を折りてあひ見しことを数ふれば十とい ひつつ四つはへにけり	伊勢物語	6／14	いはけなかりし昔よりおぼしめし初めて十 とて四つの月日を待ち暮らしつる。	○ よる	○ ふまえる
5	人ごころ憂きには鳥にたぐへつつなくより ほかの声は聞かせじ	落窪物語	6／15	…耳にも入らず、ただ泣くよりほかの事な くて、人の御袂まで乾く所なく泣き濡らし ぬれば……。	□ 参考	×
6	明けぬれどまだきぬぎぬになりやらで人の 袖さへ濡らしつるかな	続詞花集	7／1	右同	□ 参考	△ よるか

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ君ならず して誰か上ぐべき	あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵 こそ新枕すれ	あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに 馴れし夜の衣を	須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方 にたなびきにけり	浦風になびきにけりな里のあまのたく藻の 煙心弱さは	消えねただしのぶの山の峰の雲かかる心の 跡なきまで	いつはりのなき世なりせばいかばかり人の 言の葉うれしからまし	憂しとのみひとへにものは思ほえて左右に も濡るる袖かな	山の端の心も知らで行く月は上の空にて影 や絶えなむ	片岡のまつとも知らで春の野に立ち出でつ らむことぞ悔しき	あさましやあはれ憂き世を忍びつつ何とま がよふわが身なるらむ
伊勢物語	伊勢物語	源氏物語	古今集	後拾遺集	新古今集	古今集	源氏物語	源氏物語	住吉物語	散木奇歌集
7 / 12	8 / 7	8 / 12	9 / 4		9 / 6	9 / 15	11 / 3	11 / 5	12 / 1	13 / 7
あさましく思はずなるもてなしこそ、振り 分け髪の昔の契りも、かひなき心地すれ。 「新枕の名残りか」など、人思ひたるさま もわびしきに、この御文持ち騒げども、誰 かは見む。	あまた年さすがに馴れし小夜衣重ねぬ袖に 残る移り香 今よりや思ひ消えなむ一方に煙の末のなび き果てなば 右同	「かかる心の跡なきまで」と、彩み付けに したる縹の薄様……。 「なき世なりせば」と言ひぬべきにうち添 へて……。 観音堂の鐘の音、ただわが袖にひびく心地 して、「左右にも」とは、かかる事をやなど 思ふに……。	「心も知らで」など思ふべき御事にてはな けれども、思ひ乱れて立ちたるに……。 幼くよりさぶらひ馴れたる御所とおぼえ ず、恐ろしくつつましき心地して、立ち出 でつらむ事も悔しく……。	いつしか女院の御方さま、心よからぬ御気 色になりもてゆくより、いとど物ささまじ き心地しながら、まがよひるたり。	○	○	○	○	○	○
よる	無表記	よる	よる	よる	無表記	無表記	無表記	無表記	参考	無表記
○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×
ふまえる			参考	参考	さす	引く	引く	引く		

	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
引歌	おのづからまことを知れる人までも世に従ふを世の習ひにて 長らへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき 忍ぶればあらはれにけり涙にはよその袖さへ濡れぬべきかな	新古今集	重之女集	栄花物語	古今集	古今集	古今集	伊勢物語	俊頼髓脳	住吉物語	後拾遺集	続詞花集	続古今集
出典	拾玉集	新古今集	重之女集	栄花物語	古今集	古今集	古今集	伊勢物語	俊頼髓脳	住吉物語	後拾遺集	続詞花集	続古今集
頁	13／10	13／11	19／2	19／2	19／4	20／5	20／10	20／10	20／10	20／15	22／1	22／8	22／9
本文	その道芝をするにつけても、世に従ふは憂き習ひかなとのみおぼえつつ……。 とにかくに、「またこの頃やしのばれむ」とのみおぼえて明け暮れつつ、秋にもなりぬ。新院御嘆き、なべてには過ぎて、夜昼御涙の隙なく見えさせ給へば、さぶらふ人々も、よその袖さへ絞りぬべき頃なり。 右同	とにかくに、「またこの頃やしのばれむ」とのみおぼえて明け暮れつつ、秋にもなりぬ。新院御嘆き、なべてには過ぎて、夜昼御涙の隙なく見えさせ給へば、さぶらふ人々も、よその袖さへ絞りぬべき頃なり。 右同	花もこの山のは、墨染めにや咲くらむとぞおぼゆる。 われ世にありとも、頼む蔭枯れ果てて、立ち宿るべき方なく、……。 一、二日過ぎゆくほどに、忘るる草の種を得けるにはあらねども……。 右同	大納言の嘆き、秋にも過ぎて露けく見ゆるに、さしも一夜もあだには寝じとするに……。 いつしかわが命をも、このたびばかりはと思ひなりて……。 御匣殿さへ、この六月に産するとして失せ給ひにしも、人の上かはと恐ろしきに……。 大納言の病ひのやう、つひにはかばかしからじと見ゆれば、「何となる身の」とのみ嘆きつつ……。 きつつ……。	△	△	○	○	○	□	△	□	△
三角新大系	無表記	無表記	参考	参考	無表記	よる	よる	よる	参考	参考	よるか	参考	よるか
久保田新全集	×	○	×	×	○	○	△	△	△	×	△	×	△
	引く	引く			念頭に置く	ふまえる	よるか	よるか	よるか		念頭に置くか		引くか

	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
引 歌	忘れてもあるべきことをなかなか問ふにつらさを思ひ出でぬる	吹く風も問ふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里	小笹原風待つ露の消えやらでこの一節を思ひおくかな	涙をもほどなき袖にせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ	ひとりして撫づるは袖のほどなきにおほふばかりの蔭をしぞ待つ	惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしはしとどめてしがな	逢ふことも今はなき寝の夢ならでいつかは君をまたは見るべき	千たびうつ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる	長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば	秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉残りと鳥や鳴きなむ	黒髪の誰が手枕になれなれて今日はよそにぞ思ひ乱るる
出典	続詞花集	続古今集	新古今集	源氏物語	源氏物語	源氏物語	新古今集	新古今集	古今集	伊勢物語	宝治百首
頁	23 / 1	23 / 1	23 / 7	24 / 9	24 / 9	28 / 13	29 / 2	30 / 12	31 / 8	31 / 8	31 / 14
本 文	御涙もこぼれぬれば、問ふにつらきもいと悲し。	右同	風待つ露も消えやらす、心苦しく思ふに、ただにもなしとさへ見置きて行かむ道の空なく……。	「程なき袖をわれのみこそ。まことの道の障りなく」など、こまやかに仰せありて右同	折々の言の葉は思ひ出づるも忘れがたく、今を限りの名残りは身に代へてもなほ残りありぬべし。	むなしき跡を見るにも、夢ならではと悲しく、昨日の面影を思ふ。	千万声の砧の音を聞くにも、袖にくくだくる涙の露を片敷きて、むなしき面影をのみ慕ふ。	明けゆく鐘の声聞こゆるこそ、げに逢ふ人からの秋の夜は、言葉残りて鳥鳴きにけり。	右同	夜もすがらの名残りも、たが手枕にかと、我ながらゆかしきほどに、今日は思ひ出でらるる折節……。	
三角新大系	無表記	無表記	無表記	無表記	無表記	参考	無表記	よる	無表記	無表記	よるか
久保田新全集	△ 引くか	△ 引くか	○ よる	?	×	×	△ 念頭に置くか	△ 念頭に置くか	○ よって書く	○ よって書く	×

	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
引歌	かりそめに伏見の野辺の草枕露かかりきと人に語るな	鳴き弱る籬の虫とめがたき秋の別れや悲しがるらむ	波越ゆる頃とも知らで末の松待つらむとのみ思ひけるかな	人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうち寝ななむ	まだ宵にうち来てたたくひなかな誰が門さして入れぬなるらむ	若狭なる後瀬の山のちも逢はむわが思ふ人にけふならずとも	ときはなるひかげのかづら今日しこそ心の色に深く見えけれ	身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらばのちの春もこそあれ	かへりつるその暁に又寝して夢にこそ見れあかぬ名残りを	我ばかり物思ふ人や又あると唐土までも尋ねてしかな
出典	新古今集	千載集	源氏物語	伊勢物語	源氏釈	古今六帖	古今六帖	拾遺集	続詞花集	山家集
頁	32／2	33／2	33／5	33／10	33／14	34／5	34／6	34／11	34／13	38／7
本文	忍びあまりただうたたねの手枕に露かかりきと人やとがむる	四十九日は九月二十三日なれば、鳴き弱りたる虫の音も、袖の露を言問ひて、いと悲し。	「日を隔てずも申したきに、御所の御使ひなど見合ひつつ、頃とも知らでやおぼしめされむと、心のほかなる日数積もる」……。	「さては、ゆゆしき御通ひ路になりぬべし」と言ひて……。	中将といふ童、「水鶏にや。思ひ寄らぬ音かな」と言ひて、開くると聞くほどに……。	「御心ざしあらば、後瀬の山の後には」など言ひつつ……。	「かかる御身のほどなれば、つゆ御うしろめたき振る舞ひあるまじきを、年月の心の色をただのどかに言ひ聞かせむ……」。	岩木ならぬ心には、身に代へむとまでは思はざりしかども……。	鳥の音におどろかされて、夜深く出で給ふも、名残りを残す心地して、又寝にやとまでは思はねども……。	「かしこく今宵参りてけり。御渡りの折は、唐土までも白き色を尋ねはべらむ」とてうち笑はれぬるぞ、忘れがたきや。
三角新大系	？	△	○	○	？	？	？	？	？	□
	無表記	よるか	よる	よる	無表記	無表記	無表記	無表記	無表記	参考
久保田新全集	×	△	△	×	×	×	×	×	×	？
		よるか	引くか							無表記

51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
さびしさに煙をだにも絶たじとて柴折りく ぶる冬の山里	思ひやれ懸樋の水の絶えだえになりゆくほ どの心細さを	年暮れしその営みは忘られてあらぬさまな るいそぎをぞする	みちのくにありてふ川の埋もれ木のいつあ らはれて憂き名取りけむ	いにしへもかくやは人のまどひけむわがま だ知らぬしのめの道	住みわびて宿のあるじもあくがれぬ懸樋の 水も絶えざらめやは	山賤の垣ほにはへる青つづら人はくれども 言づてはなし	山賤の垣ほ荒るともをりをりにあはれはか けよ大和撫子	世の中にあらましかばと思ふ人なきが多く もなりにけるかな	さらぬだに重きがうへの小夜衣わがつまな らぬつまな重ねそ	袖こほる小夜の川風さむしろに片敷きかぬ る宇治の橋姫	露は袖に物思ふころはさぞな置かならず 秋の習ひならねど
後拾遺集	詞花集	山家集	続古今集	源氏物語	風葉集	古今集	源氏物語	拾遺集	新古今集	洞院撰政 家百首	新古今集
40／3	40／3	40／4	40／7	41／5	41／11	43／1	43／1	44／11	45／14	46／2	48／2
「煙をだにも」とて、柴折りくべたる冬の 住まひ、懸樋の水の音づれも途絶えがちな るに……。	右同	年暮るる営みも、あらぬさまなるいそぎに て過ぎゆくに……。	いつあらはれてとおぼゆるに、今宵はこと さらこまやかに語らひ給ひつつ……。	「今朝の有明の名残りは、わがまだ知らぬ 心地して」などあれば……。	前なる槽に入る懸樋の水も凍り閉ぢつつ、 物悲しきに……。	「山賤の垣穂も光出で来て」など、面々に 言ひ合ひたるこそ……。	右同	あらましかばと思ふ涙は、人に寄りかかり て、ちとまどろみたるに……。	むば玉の夢にぞ見つる小夜衣あらぬ袂を重 ねけりとは	ひとりのみ片敷きかぬる袂には月の光ぞ宿 り重ぬる	袖には露の隙なきは「かならず秋の習ひな らねど」とおぼえても……。
?	?	?	□	?	□	?	?	?	○	○	?
無表記	無表記	無表記	参考	無表記	参考	無表記	無表記	無表記	よる	よる	無表記
○	△	○	△	○	×	□	□	△	△	×	○
引く	念頭に置 くか	引く	引くか	引く		参考	参考	引くか	踏まえて 詠むか		引く

	引歌	出典	頁	本文	三角新大系	久保田新全集
74	涙河落つる水上早ければ堰きぞかねつる袖のしがらみ	拾遺集	64 / 5	いつしかかこち顔なる袖のしがらみ堰きあへず……。	○	○
75	湊入りの葉分け小舟障り多みわが思ふ君に逢はぬ頃かな	拾遺集	64 / 8	「これの御隙は、いつも何の葦分けかあらむ」など聞こゆるよしを伝へ申せば……。	□ 参考	○
76	筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るには障らざりけり	新古今集	64 / 9	「端山繁山の中を分けむなどならば、さもあやにくなる心いられもあるべきに、越え過ぎたる心地して」と仰せありて……。	○	○

〔注〕 本文の引用は、三角新大系によるが表記を改めた。また頁の欄は三角新大系の頁／行とする。

〔A〕 引歌とするもの 19首

評語へよる 19首

〔B〕 引歌存疑とするもの 6首

評語へふまえるか 1首

評語へよるか 4首

評語へ引くか 1首

〔C〕 参考歌 19首

〔D〕 無表記 32首

総計 七十六首

三角新大系の著しい特徴は、巻一の和歌七六首中、参考歌Ⅱ一九首（25%）、無表記歌Ⅱ三三首（42%）、合わせて五一首（67%）の歌が、引歌とは直接関係ないものとして、安易に羅列されている点である。三角氏ともあろう学界に君臨する（？）高名な研究者が七〇%近くの

関連性の薄い歌を貴重な「脚注」に無定見に並べたてているのは驚くばかりである。脚注において、もつとほかにすべきこと、書くべきことがなかったのであろうか。

私見によれば、「頭注」「脚注」というような限定されたスペースには、たとえば、本文の読解のための歴史・社会・文化（習俗）などの説明とか、人間関係・人物心理の解読のためのヒントとか、もつと有効的に読者の読みを助けるような解説を入れるべきである。三角氏には、是非、三弥井書店刊『平家物語』（上下二巻 佐伯真一氏ほか校注）の用意周到な頭注を見ていただきたい。もつとも、三角氏には、頭注・脚注などで押つけがましい読みを読者に強制すべきではないという反論があるかも知れないが、それは、自らの文学的センスの欠如、文学研究者としての責任回避を隠蔽させた狡猾な発言と考えざるをえない。さらに、三角新大系の引歌関係で理解に苦しむのは、何の注記もな

いまの無表記で、和歌だけをポツンと掲げている場合がすこぶる多いという点である。前掲一覽表によれば、「引歌」「引歌存疑」「参考歌」などをきちんと表記している場合も少なくないのに、巻一の脚注に引かれた七六首のうちの三二首（42%）が、何の注記もないいまの無表記で安易に置かれていたのである。そうした無表記歌とは、いったい何なのであろうか、「引歌」なのか、「参考歌」なのか、あるいは別のものなのか、ぜひ三角氏の明確な答えを聞いてみたいものである。

憶測すれば、何の評語も記されない和歌を掲げることによって、そこに「引歌的ニュアンス」と「参考歌的ニュアンス」との両方をこめ、さらに枯木のにぎわいというように何でも並べたてて空白を少なくするといった、いわば狡猾な作戦であるようにも思えてならない。権威ある岩波の本、そして学界に君臨する三角氏の著書にしては、あまりにも無責任な方法である。研究を大量生産して自己を誇示すればよいというものではなく、厳格なる研究者としての姿勢を学び、少なくとも読者を惑わせないような良心的・学問的な仕事が必要であることを、三角氏とともに自戒をこめて記しておきたい。

3

次に、三角新大系の巻一の引歌類について、問題のありそうな引歌を取りあげ、前掲の引歌の要件を考慮しながら、いささか吟味検討してみたい。

※たとえば〔10・11〕は前掲一覽表の番号、へとは・9／4は、三角新大系の九頁四行目を示す。

●〔10番・11番〕

〈引歌〉

・10番 須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり（古今集）

・11番 浦風になびきにけりな里のあまのたく藻の煙心弱さは（後拾遺集）

へとは・9／4

・今よりや思ひ消えなむ一方に煙の末のなびき果てなば（雪の曙）

〈評〉

三角新大系では引歌と認定しているが、類句をみると、「なびき果てなば」（と）に対して、「なびきにけり」（10番）、「なびきにけり」（11番）とあつて、これだけの類似で引歌とするのは何とも甘いといわざるをえない。『古今集』の引歌が「読み人知らず」であることから考えると、10番と11番の歌の表現は、類型的なものと考えられ、『とはずがたり』の歌の引歌と考えるのには根拠薄弱のようである。引歌というものが作者の表現意識の上での重い意味を担っているとするならば、引歌の認定は安易に行なつてはならないのである。

ちなみに、久保田新全集は、「参考歌」としてとめており、新潮日本古典集成の福田氏も「引歌存疑」と慎重な姿勢を示しておられる。従つて、この場合は、「参考歌」とするのが妥当なのではないだろうか。

なお、右の『とはずがたり』の歌（雪の曙）は、『源氏物語』『栞木』

巻における、柏木と女三の宮の「煙」を題材とした有名な歌、

行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ

などを想起させる。「煙」に恋の思いを託して詠んでいる点は、『とは
ずがたり』の作者が熱烈な源氏ファンであり、さまざまに「源氏取り」
をしていることを考えると、「参考歌」に加えてもよいであろう。

●〔40番〕

〈引歌〉

・黒髪たまくらの誰が手枕たまくらになれなれて今日はよそにぞ思ひ乱るる（宝治百
首）

へとは・31/14

・誰が手枕にかと、我ながらゆかしきほどに、今日は思ひ出でらる
る折節……。

〈評〉

三角新大系は、「引歌存疑」（「よるか」）としているが、再検討の余
地がありそうである。両者を比較してみると、

・へ宝治百首

誰が手枕に……今日は……思ひ乱るる

・へとは

誰が手枕に……今は思ひ出でらるる

確かに表面上はかなり類似的であるようにみえるが、この場合、類似
の中味が問題である。思うに、引歌認定の根拠としての共通・類似の

語句は、一般的・日常的・類型的なものではないもの、つまり個性的・
特異的・独創的なものが望ましい。その点、右の重要なキーワードた
る「誰が手枕」の語は、「誰が袖」などと同様によく使用される、一種
の慣用句とみられないこともない。「誰が手枕……今日は思ひ出でらる
る」という語句も、一般性・日常性をはらんだ呼応関係から出てきた
ものではないだろうか。

思えば、『宝治百首』などというマイナーな歌集を発掘した三角洋一
氏の得意満面たる様子が想像できるが、引歌研究は埋蔵金探索のイベ
ントではないのであるから、もっと慎重で邪心のない姿勢が望まれて
ならない。右の引歌を掲げているのは三角新大系のみであるが、「参考
歌」程度にとどめておくべきである。

●〔60番〕

〈引歌〉

・さらぬだに重きがうへの小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ（新
古今集）

へとは・45/-2

・むば玉の夢にぞ見つる小夜衣あらぬ袂を重ねけりとは（後深草院）

〈評〉

三角新大系は、右の歌を引歌としている（「よるか」）が、そんなに安

易に断定してよいものであろうか。ちなみに久保田新全集は「引歌存疑」「踏まえて詠むか」とする。

確かに「さらぬだに」の歌は、寂蓮の著名な歌で、引歌としてもよく利用されるが、『とはすがたり』の歌との関係は薄いのではないだろうか。両者の類似句は「小夜衣」のみであって、「わがつまならぬつまな重ねそ」と「あらぬ袂を重ねけりとは」とが多少関わっているかにみえる。

しかし、「小夜衣」はよく使われる歌語的なものであり、下の句も引歌関係を認定するほど似ているとはいえない。全体の人間関係・場面状況からみても、両歌は引歌関係を認定するほどの共通性・類似性に乏しいものと考えられる。三角氏の、例のごとき一途な思いこみによるのであろうか。「引歌存疑」とする久保田新全集に従って、「引歌存疑」とするのがこの場合も妥当である。

●〔61番〕

〈引歌〉

・袖こほる小夜の川風さむしろに片敷きかぬる宇治の橋姫（洞院撰 政家百首）

へとは・46／2

・ひとりのみ片敷きかぬる袂には月の光ぞ宿り重ねる

〈評〉

三角新大系は引歌（「よる」と断定しているが、久保田新全集は「引

歌存疑」（「念頭において詠むか」としている。

両歌を具さに対比してみると、類似句は「片敷きかぬる」のみといってもよく、場面状況も類似しているとはいいたい。あるいは三角氏は「片敷きかぬる」という表現の特異性にとびつたのかもしれない（確かに用例は少ない）が、それだけで引歌と安易に認定するのはいかなものであるか。『とはすがたり』の作者は、後世の我々研究者が机上の空論をもてあそぶように、本当に「袖こほる」の歌をふまえて詠んだのであろうか。

いうまでもなく、「片敷く」という語は、有名な「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（『古今集』）の歌以来、多くの歌に詠まれてきた、いわば歌語的な常用句である。『とはすがたり』の作者も、『古今集』の歌に詠まれた橋姫伝説に関わる歌を念頭に置いたのかも知れないが、もしそうだとしたら、久保田新全集のように、「引歌存疑」あるいは「参考歌」とするのが穏当というものである。

4

次に、三角新大系の巻一の引歌のうち、無表記の引歌について検討してみたい。

前に述べたように、巻一の引歌七三首のうち、実に三三首（約42%弱）の歌が何のコメントもなく「無表記」のまま掲げられている。その他の歌については、「引歌」「引歌存疑」「参考歌」などと明記されているのであるから、「無表記」の歌は、それ以外の何か別のものと考えざるをえない。ところが、凡例・その他をみても、「無表記歌」に関する

るそれらしき説明は見当たらないかのようである。思えば、「無表記歌」ならぬ「無責任歌」といったら言い過ぎであろうか。

顧みれば、若き日より典拠・引歌研究を主たる武器にして学界を遊泳してきた硯学・三角氏にはあまりにもお粗末である。少なくとも読者に対して無責任といえよう。老獪な研究者は自己に都合の悪いことは無視するという悪しき習性がわが学界にはあるが、「無表記歌」に関する三角氏の釈明をぜひ聞きたいものである。

それはさておき、批判するだけが研究者の責務ではないので、三角新大系の「無表記歌」について、いささか吟味検討し、試案を示して今後の引歌研究の一助としたい。

●〔12番〕

〈引歌〉

・消えねただしのぶの山の峰の雲かかる心の跡なきまで（新古今集）

へとは・9／6

・「かかる心の跡なきまで」と、彩み付けにしたる縹はなだの薄様に書きたり。「忍ぶの山の」とある所を、いささか破りて……。

〈評〉

右の歌は明らかに広い意味での引歌なので、自明のこととして「無表記」ですましたのかも知れないが、凡例等なことわない限り、あまりにも読者に対して失礼なのではないだろうか。公的一般的な注釈書であるから、研究者だけがわかっていればよいというものではない

はずである。ちなみに久保田新全集では「さす」とあって「引歌」としている。

●〔13番〕

〈引歌〉

・いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし（古今集）

へとは・9／15

・さまざま承り尽くすも、今やいかがとのみおほゆれば、「なき世なりせば」と言ひぬべきにうち添へて……。

〈評〉

右の場合は、『古今集』の有名な歌を引歌としたもので、諸注釈書はすべて「引歌」と明示している。ここも「無表記」である理由がわからない。自明のことだから、そんなこともわからない読者は無知だとしてもいうのであろうか。

●〔14番〕

〈引歌〉

・憂しとのみひとへにものは思ほえて左右にも濡るる袖かな（源氏物語）

へとは・11／3

・観音堂の鐘の音、ただわが袖にひびく心地して、「左右にも」と

は、かかる事をやなど思ふに……。

〈評〉

ここも明らかに引歌であるが、「無表記」の理由は不明。衆知のことだから省略するといふのであれば、引歌と明記している場所との整合性を欠くのではないだろうか。

●〔15番〕

〈引歌〉

・山の端の心も知らで行く月は上の空にて影や絶えなむ（源氏物語）
へとは・11／5

・「一人行かむ道の御送りも」などいぎなひ給ふも、「心も知らで」など思ふべき御事にてはなけれども……。

〈評〉

ここも〔14番〕同様に、『源氏物語』の有名な歌を引歌とした個所で、自明のことなのであるが、研究者（校注者）が自明であるからといって、さまざまなレベルが予想される読者が自明であるとは限らないであろう。三角氏だけに限らないが、どうも研究者などというものは、狭い仲間意識だけに支えられた閉鎖的な世界に安住していて、いわば唯我独尊である場合が少なくないようである。広い読者が予測される古典の校注などは読者に対して責任を負わなければならないと思うのであるが、いかがなものだろうか。

●〔17番〕

〈引歌〉

・あさましやあはれ憂き世を忍びつつ何とまがよふわが身なるらむ
（散木奇歌集）

へとは・13／7

・いつしか女院の御方^{かた}さま、心よからぬ御気色になりもてゆくより、いとど物すさまじき心地しながら、まがよひたり。

〈評〉

この場合は、右の引歌とともに、三角氏の得意とする鎌倉物語『風につれなき』の「まがよふ」の用例をも引いている点から、「まがよひるたり」の「参考歌」として引いているのであろう。もしそうだとしたら、「引歌」も「参考歌」も同列の「無表記」とするのは明らかに校注者としての過失である。ちなみに、久保田新全集は、何も触れていない。

なお、憶測すれば、引歌の「あはれ憂き世を忍びつつ」という部分が『とはずがたり』の二条の心理に多少通うところがないでもない点を考慮すると、「無表記」にしておいてあわよくば「引歌存疑」のニュアンスをこめておこうとした、三角氏一流のしたたかな計算の結果なのかもしれない。「参考歌」なのに「無表記」である理由がわからないのは私だけであらうか。

●〔18番〕

〈引歌〉

・おのづからまことを知れる人までも世に従ふを世の習ひにて（拾玉集）

へとは・13／10

・その道芝をするにつけても、世に従ふは憂き習ひかなとのみおぼえつつ……。

〈評〉

この場合は、三角新大系の脚注に「屈原・漁夫による当時の諺か」とあるように、一般的な慣用的表現とみるべきで、何で「無表記」なのかはわからないが、「参考歌」とみるのが穏当であろう。

●〔19番〕

〈引歌〉

・長らへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

（新古今集）

へとは・13／11

・とにかくに、「またこのごろやしのばれむ」とのみおぼえて明け暮れつつ、秋にもなりぬ。

〈評〉

この場合は、久保田新全集も「引歌」としているように、明らかに

「引歌」である。三角新大系は、この場合もきちんと明記すべきである。注釈者の責任放棄と批判されかねないことは避けるのが研究者としての責任であろう。

●〔22番〕

〈引歌〉

・深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け（古今集）

へとは・19／4

・花もこの山のは、墨染にや咲くらむとぞおぼゆる。

〈評〉

この場合も、三角新大系は「無表記」であるが、『古今集』の著名な歌を「引歌」としていることは明らかである。ただし、久保田新全集は「念頭に置く」と、ややぼかしたコメントを付しているが、広い意味での「引歌」とすべきであろう。

●〔30番・31番〕

〈引歌〉

・30番 忘れてもあるべきことをなかなか問ふにつらさを思ひ出でぬる（続詞花集）

・31番 吹く風も問ふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里

（続古今集）

へとは・23／1

・御涙もこぼれぬれば、問ふにつらさもいと悲し。

〈評〉

右の場合、二首の引歌と『とはすがたり』の本文とを比べてみると、「問ふにつらさ」の語句だけが共通である。しかし、「問ふにつらさ」という語句は、たとえば『新編国歌大観』の勅撰集編だけをみても五首の用例があり、歌語的な慣用であつたとみられる。

引歌は作者の意識の重大な意味を負っているという立場から認定は慎重にしなければならないとすれば、「参考歌」程度とするのがこの場合も妥当である。ちなみに久保田新全集は「引歌存疑」としている。

なお、同じ中世の女流日記『うたたね』には、

これやさし問ふにつらさの数々に涙を添ふる水茎の跡

と、『とはすがたり』の右掲文に類似した歌が見出されるが、いかがであらうか。後考を待ちたいと思う。

●〔32番〕

〈引歌〉

・小笹原風待つ露の消えやらでこの一節を思ひおくかな（新古今集）

へとは・23／7

・「風待つ露も消えやらす、心苦しく思ふに、ただにもなしときへ見置きて行かむ道の空なく」など、いと弱げに泣かるるほどに……。

〈評〉

この場合は、「風待つ露の消えやらす」という一文が共通であること、引歌である『新古今集』の俊成の歌が著名であること、引歌中の「この一節」に「子」が懸けてあつて、『とはすがたり』の中で死の床にある父雅忠が子（作者二条）を思いやる場面に通じていることなどから、「引歌」と考えたい。三角新大系がなぜ「無表記」としているか理解しがたいが、久保田新全集のようにきちんと「引歌」と明記すべきである。

●〔33番・34番〕

〈引歌〉

・33番 涙もほどなき袖にせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ

（源氏物語・浮舟）

・34番 ひとりして撫^なづるは袖のほどなきに覆ふばかりの蔭をしぞ

待つ（源氏物語・濡標）

へとは・24／9

・「ほどなき袖を、我のみこそ、まことの道の障りなく」など、こまやかに仰せありて……。

〈評〉

この場合、共通するのは「ほどなき袖」のみであるが、その「ほどなき袖」は、必ずしも『源氏物語』だけではなくて、何首かの歌に散見する、一種の慣用的な語句である。従って、右掲の引歌二首は、用例という意味で「参考歌」とするのが穏当であらうか。ちなみに久保

田新全集はまったく取り上げていない。

しかし、『源氏物語』からの引歌である点に問題がありそうである。特に〔34番〕の引歌は、両作品の内容的な類似性に関わっている。すなわち、『とはすがたり』にあつては、父雅忠の死に際して後深草院が幼い二条を後見・庇護しようとする父親的立場を「ほどなき袖」と言つたのに対して、『源氏物語』でも、姫君を生んだ明石の君が光源氏の父親的庇護を求めた心情を「袖のほどなき」と表現している。この場合は情況の類似性に加えて、作者二条の『源氏物語』への傾倒ぶりを考慮すると、〔34番〕の歌は引歌の可能性もでてくる。そして、それももし三角氏の新見であるとすれば、不首尾や欠陥の少なくない三角新大系の稀にみるヒットといつてよいだろう。ただし、「引歌」と明記すべきである。

●〔38番・39番〕

〈引歌〉

・38番 長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば
(古今集)

・39番 秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこりて鳥や鳴きなむ
(伊勢物語)

へとは・31／8

・明けゆく鐘の声聞こゆるこそ、げに逢ふ人からの秋の夜は、言葉残りて鳥鳴きにけり。

〈評〉

この場合は、引歌の〔38番〕と〔39番〕の両方の歌の語句を受けて「げに」と総括しているわけであるから、明らかに「引歌」である。久保田新全集も「引歌」としているのに、三角新大系はなぜ「無表記」にしているのだろうか、理解に苦しむ。

●〔45番〕

〈引歌〉

・まだ宵にうち来てたたく水鶏かな誰が門鎖して入れぬなるらむ
(源氏釈)

へとは・33／14

・中将といふ童、「水鶏にや。思ひ寄らぬ音かな」と言ひて、開くと聞くほどに……。

〈評〉

この場合、両者に共通するのは、「水鶏」という語だけである。「水鶏たたく」は慣用的表現であるから、なぜ「無表記」なのかはわからないが、「参考歌」とすべきであろう。

●〔46番〕

〈引歌〉

・若狭なる後瀬の山ののちも逢はむわが思ふ人に今日ならずとも
(古今六帖)

へとは・34/5

・「御心ざしあらば、後瀬の山の後には」など言ひつつ、今宵は逃れぬべく、あながちに言へば……。

〈評〉

この場合、両者に共通している「後瀬の山の後」という表現は、福田秀一氏（新潮日本古典集成）も指摘されているように、『万葉集』以来の和歌的慣用句で、よく使われるものである。従って、この場合も、「参考歌」とするのが妥当であろう。

なお、この場合の「参考歌」の一つとして次のような注目すべき歌のあることを記しとどめておきたい。『新後撰集』（正安三年へ一三〇一）成立。二条は四十四歳）の中に、

百首歌たてまつりし時、「逢不遇恋」

前大僧正良覚

逢ひ見てし後瀬の山の後もなど通はぬ道の苦しからむ

右の歌の詠者・前大僧正良覚は、二条の愛人雪の曙（西園寺実兼）の弟・西園寺実俊の息子で、『徒然草』に「榎木僧正」として登場している有名な人である。二条と良覚の関係は明らかではないが、二条と実兼との親密な関係から考えて、何らかの接点はあったのではないだろうか。そうした人間関係の中にあつて、右の「逢ひ見てし」の歌は、『とはがたり』の場面情況に類似しており、二条が「後瀬の山の後には」と言った相手が良覚の叔父たる実兼（雪の曙）である点を考え合わせると、両者はまったく無関係であるとはいえないのではないだ

ろうか。こういう場合、警察の戸籍調査のときを得意とする三角氏であつたら、わが意を得たりと手放しで「引歌」とされることであろうか。

しかし、引歌研究というものが、研究者の得点争いでもないし、机上の空論めいた言語遊戯でもなく、厳格な学問のための基礎作業の一つであるという立場からすれば、この場合も慎重な判断から、「参考歌」とするのが穏当なのかもしれないと思つてみた。

●〔47番〕

〈引歌〉

・ときはなるひかげのかづら今日しこそ心の色に深く見えけれ（古今六帖）

へとは・34/6

・かかる御身のほどなれば、つゆ御後ろめたき振る舞ひあるまじきを、年月の心の色を、ただのどかに言ひ聞かせむ。

〈評〉

この場合、両者に共通するのは「心の色」の語句のみで、内容的にも類似しているわけではないので、「参考歌」と考えられる。「引歌」も「参考歌」も同じように「無表記」である理由がわからない。

●〔48番〕

〈引歌〉

・身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらばのちの春もこそあれ
(拾遺集)

へとは・34/11

・岩木ならぬ心には、身に代へむとまでは思はざりしかども、心の
ほかの新枕は、御夢にや見ゆらむと、いと恐ろし。

〈評〉

この場合も、共通しているのは「身にかへて」の語句のみで、しかもそれが一般的なものであることを考えると、「参考歌」というより「用語例」というべきであろう。

それにしても、「身に代へて」というような一般的・日常的なごく普通の言葉をなぜ脚注に引くのであろうか。単なる用語例を脚注にのせる負い目から「無表記」にしたのであろうか。校注者三角氏の真意を是非知りたいものである。

●〔49番〕

〈引歌〉

・かへりつるその暁に又寝して夢にこそ見れあかぬ名残りを(「続詞花集」)

へとは・34/14

・鳥の音におどろかされて、夜深く出で給ふも、名残りを残す心地して、又寝にやとまでは思はねども、そのままにて臥したるに……。

〈評〉

この場合、「又寝」という語をキー・ワードにして、全体を比較してみると類似的であることは否定できないであろう。しかし、物語の後朝の場面としては類型的なもので、「又寝」「名残り」などの語も慣用的なものと考えられる。ちなみに久保田新全集では47番へ48番へ49番へは引歌として取りあげられていない。従って、この場合も、慎重な判断から「参考歌」とするのが穏当であろうか。それにしてもあまり意味のある引用とはいえないであろう。

●〔50番〕

〈引歌〉

・我ばかり物思ふ人やまたあると唐土までも尋ねてしがな(山家集)

へとは・38/7

・かしこく今宵参りてけり。御渡りの折は、唐土までも白き色を尋ね侍らむ

〈評〉

この場合、類句は「唐土までも白き色を尋ね侍らむ」と「唐土までも尋ねてしがな」のみであるから、それだけで「引歌」と断定することとはむずかしいが、二条が私淑していた西行の歌であることを考慮すると、「引歌存疑」とするのが穏当であろうか。

●〔51番・52番・53番〕

〈引歌〉

- ・51番 さびしさに煙をだにも絶たじとて柴折りくぶる冬の山里
(後拾遺集)

- ・52番 思ひやれ懸樋の水の絶えだえになりゆくほどの心細さを
(詞花集)

- ・53番 年暮れしそのいとなみは忘られてあらぬさまなるいそぎを
ぞする (山家集)

へとは・43／3

・「煙をだにも」とて、柴折りくべたる冬の住まひ、懸樋の水の訪れも途絶えがちなるに、年暮るるいとなみも、あらぬさまなるいそぎにて過ぎゆくに……。

〈評〉

三角新大系は、読者が勝手に判断せよという意図なのか、右の三首を羅列しているだけで何のコメントもない「無表記」であるが、久保田新全集は、「51番」と「53番」を引歌とし、「52番」を「引歌存疑」(「念頭に置くか」としている。引歌三歌を具さに吟味してみると、語句の類似に加えて、和泉式部の著名な歌である「51番」と、二条のあこがれた西行の歌である「53番」は、ともに「引歌」と考えてよいと思う。

しかし、「52番」の歌は、類似句とみられる「懸樋の水の絶えだえになりゆく」が一般的・慣用的な表現で、内容的にみても『とはずがた

り』の引用文との関係が薄弱である点などから考えて、「引歌存疑」とするのが妥当であろう。

●〔55番〕

〈引歌〉

- ・いにしへもかくやは人のまどひけむわがまだ知らぬしのめの道
(源氏物語)

へとは・41／5

- ・今朝の有明の名残りは、わがまだ知らぬ心地して……。

〈評〉

この場合、両者は、「わがまだ知らぬ」という特異な表現が共通するのに加えて、全体として場面情況が類似している点、引歌を載せるのが二条の傾倒していた『源氏物語』である点などから考えて、「55番」の歌は「引歌」としてよいだろう。ちなみに、三角新大系がなぜか「無表記」であるのに対して、久保田新全集は「引歌」としている。

●〔57番・58番〕

〈引歌〉

- ・57番 山賤の垣ほにはへる青つづら人はくれども言づてはなし
(古今集)

- ・58番 山賤の垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ大和撫子
(源氏物語)

へとは・43／1

・念仏の尼たちの袈裟・衣、仏の手向けになど思ひ寄らるるに、いよいよ「山賤の垣ほも光出で来て」など、面々に言ひ合ひたるこそ……。

〈評〉

この場合、三角新大系は、いずれも「無表記」のままて羅列しているにすぎないのに対して、久保田新全集は、〔57番〕の歌と『玉葉集』の歌を引き、「作例の多い和歌的表現」としているが、「参考歌」と考えているものと推測される。この場合は、「参考歌」程度のものとみるのが妥当であろう。

●〔59番〕

〈引歌〉

・世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くなりけるかな（拾遺集）

へとは・44／11

・あらましかばと思ふ涙は、人に寄りかかりて、ちとまどろみたるに、昔ながらに変わらぬ姿にて……。

〈評〉

この場合、「あらましかば」というキー・ワードの共通性に加えて、人の死を詠んだ内容の類似性から考えて、「引歌」とすべきか、「引歌

存疑」とすべきか判断に迷うところである。慎重な視点からすれば、

「引歌存疑」あたりが妥当であろうか。久保田新全集は「引歌存疑」としているのに対して、三角新大系は、そのあたりの判断をばかして、「無表記」として逃げていたのであるか。

●〔62番〕

〈引歌〉

・露は袖に物思ふ頃はさぞな置くかならず秋の習ひならねど（新古今集）

へとは・48／2

・袖には露のひまなさは、「かならず秋の習ひならねど」とおぼえても、一月などにもなき違ひも、いかにとばかり、なすべき心地せず。

〈評〉

この場合、両者は、「かならず秋の習ひならねど」の一文が一致するほか、「露」「袖」などの共通語もみられる点から、久保田新全集が指摘するように、「引歌」と考えてよいと思う。三角新大系は、こんな明快な引歌は読者自身で判断せよというのであろうか。ぜひ彼の恩師たる久保田氏を見ならってほしいと思う。

●〔71番〕

〈引歌〉

・世の中の憂きは今こそうれしけれ思ひ知らずはいとはざらまし
(千載集)

へとは・52/14

・御出家あるべしとて、人数定められしにも、「女房には東の御方、二条」とあそばされしかば、憂きはうれしきたよりもやと思ひしに……。

〈評〉

この場合、両者は、「憂きはうれしきたより」という成句が類似しているが、それがことわざ風の慣用的表現ともみられる点から、「引歌」かどうかの判断はむずかしいところである。久保田新全集は「引歌存疑」(念頭に置くか)としていて穏当であるが、〔71番〕の歌が寂蓮の著名なものだけに、慎重な私にしても「引歌」としたい衝動にかられてしまうのである。三角新大系のように「無表記」で逃げる手もあるが、そういう狡猾な手は私の性分に合わない。ここは、久保田氏の「引歌存疑」に従っておき、後考を待ちたいと思う。

〔注〕

『とはすがたり』の本文の引用は、三角洋一氏編・新日本古典文学大系『とはすがたり・たまきはる』(平6・岩波書店)によるが、読みやすさの便宜を考えて、通行の送りがな・歴史的仮名づかいに改めた。

(平成十二年十月十日稿)